

20	蒲郡	蒲郡市立中部中学校	かめおか こうき
			龜岡 晃希
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学・その他）

研究題目 朗読を通じて言葉や描写に着目して物語を読み深める生徒の育成

～中2国語「みどり色の記憶」の学習を通して～

蒲郡市立中部中学校 龜岡 晃希

研究要項

1 はじめに（主題設定の理由）

蒲郡市国語部会では、これまでに生徒の実態に合った教材の発掘を行い、その教材の特性を生かした実践を重ねてきた。今年度も、生徒の実態に合い、心が揺り動かされるような教材を選んで研究に取り組むことにした。

1年時に学習した「星の花が降るころに」では、登場人物が生徒たちと同じ年代で、同じような経験をしたことがある生徒もいた物語だったため、物語を読むことに楽しさを感じていた。また、自分の経験と比較して登場人物の心情を考えたり、物語の全体構造を捉え、話の続きを書いたりすることができた。一方で「銀木犀」などの情景描写が物語に与える影響について考える生徒は少なかった。そこで、登場人物が中学生で、情景描写から登場人物の心情を読み取ることができる魅力的な教材を準備すれば、情景描写にも着目して物語を読み深めることができるのではないかと考えた。

また、これまでの国語の時間では、初読や単元の終末の感想で、「他の物語を読んでみたい」「登場人物の人物像や心情を考えることが楽しい」などの感想が多く見られた。その中で「声に出して読んでみたい」という感想があった。そこで朗読活動を通して、声の調子や間の取り方によって伝わる登場人物の心情や情景の広がりを感じ取ることで、文字情報だけでは気づきにくい表現の工夫や作品の魅力に目を向けることができるだろうと考えた。

2 何で

（1）教材について

本教材「みどり色の記憶」（著・あさのあつこ）は、本学年の生徒たちと年齢が近い中学3年生を中心人物に据えて描かれている。この物語は、自分の将来について母との考えの違いに悩んでいる千穂が、同級生である真奈の両親が営んでいるパン屋の前を通る場面から始まる。真奈はパン職人になりたいという前向きな思いをもっているのに対して、千穂は進路に対する悩みを抱えている。千穂と真奈が対比的に描かれていることで千穂の葛藤が浮き彫りになっている。母は娘のことを思っているはずなのに、千穂にはそれが「干渉」や「押しつけ」のように感じられ、自分の気持ちをうまく伝えられずに心を閉ざしている。ある放課後、千穂は昔から親しんできた大きな樹に登り、葉が揺れる音や幹の感触の中で、幼いころの記憶や、友達との会話、そして母とのすれ違いを静かに思い返していく。その中で千穂は、「自分は何が好きなのか」「どう生きたいのか」「母と本当はどう向き合いたいのか」を少しずつ整理していく。物語の最後で千穂は、はっきりした答えではないけれど、母から逃げずに“ちゃんと話そう”と決意して家に帰っていく。

（2）教材の価値

①生徒たちと年齢が近く、自分ごととして読み進めることができる物語構造

本教材は、生徒たちと同年代の中学生を主な登場人物として描いた物語文である。登場人物の年齢や置かれている状況が生徒たち自身と非常に近く、進路選択や将来に対する漠然とした不安、親との関係における葛藤などは、多くの生徒がこれから直面する、あるいはすでに感じ始めている問題であると考えられる。また、母と子の関係性は現代的で子どもにとっても身近なテーマである。

そのため、生徒たちは物語の出来事を「遠い話」ではなく、自分自身の生活や経験と重ねながら読み進めることができる。千穂の迷いや戸惑い、はっきりと気持ちを言葉にできないもどかしさは、生徒自身の実感と結びつきやすく、登場人物の心情を主体的に捉えようとする態度を引き出すことができるだろう。

このように、生徒自身の経験や思いを読みの手がかりとして活用することで、登場人物の心情理解が深まり、物語世界に意欲的に入り込んで読むことができる教材であると考えた。

②「緑の香り」「大樹」など、物語を象徴する情景描写の効果的な表現

本教材には、「緑の香り」や「大樹」といった象徴的な語句や情景描写が随所に用いられており、それらが人物の心情や物語の展開と密接に結びついている点に大きな特徴がある。情景は単なる背景として描かれるのではなく、千穂の内面の変化を映し出す重要な手がかりとして機能している。

例えば、「緑の香り」が次第に濃く感じられていく描写は、千穂の心が少しずつ落ち着き、前向きな気持ちへと変化していく過程を象徴的に表していると捉えることができる。また、樹の上から見える「金色の風景」は、千穂の将来がまだ確定していないながらも、明るさや可能性を含んでいることを暗示的に示している。

このように、情景描写と人物の心情とを結び付けて読むことで、生徒は言葉の表層的な意味だけでなく、表現がもつ象徴性や効果について考えることができる。情景を根拠に人物の心情を読み取る活動を通して、表現に着目した読みの力を育成できる教材であると考えた。

③世界 17 言語に翻訳され、朗読されてきた物語である点

「みどり色の記憶」は、NHK WORLD-JAPAN のラジオ番組において、世界 17 言語に翻訳され、朗読作品として紹介されてきた物語である。本作品は言語や文化の違いを超えて、多くの人々に受け入れられてきた普遍的なテーマや表現をもった朗読作品である。

実際に朗読音声を聴く活動を取り入れることで、生徒は文章を「読む」だけでなく、「聞く」ことによって物語の世界に触れることができる。また、自分で朗読するためには、登場人物の心情や場面の意味を深く読み取る必要があることに気づかせることができる。朗読活動を通して、読みを深める必然性を生徒自身が実感できる点においても、本教材は有効であると考えた。

3 目ざす生徒像 朗読を通じて言葉や描写に着目して物語を読み深める生徒

(1) 物語や朗読のおもしろさに気づき、自ら読み解こうとする生徒

(2) 登場人物の言動や情景描写を手がかりに作品を読み、登場人物の心情を想像しようとする生徒

4 研究の方法

(1) 研究の仮説

仮説Ⅰ 生徒が「読みたい」と感じられるような教材を用意し、朗読と出合う場面を工夫すれば、物語や朗読のおもしろさに気づき、自ら読み解こうとするであろう。

仮説Ⅱ 自分の学びをふり返り、新たな追究へ導く教具の工夫をしたり、自分の考えを伝え合う場を設定したりすれば、登場人物の言動や情景描写を手がかりに作品を読み、登場人物の心情を想像するであろう。

(2) 研究の手立て

手立てⅠーア 登場人物の言動や情景描写が豊かな自主教材の活用

登場人物の言動や、情景描写が多く、中学生を主人公とする物語文「みどり色の記憶」を自主教材として活用する。主人公が生徒たちと同年代で、登場人物の言動が多い物語文は読みやすいだろう。また、主人公が同級生や思い出の場所である大樹、緑の香りと出合うことで悩みを解決していく前向きな話は、自ら読みたいと強く感じるのではないかと考えた。

手立てⅠーイ ゲストティーチャーによる朗読を聴く場面の設定

単元の初めにゲストティーチャーにみどり色の記憶を朗読してもらい、生徒に朗読がもつ表現の力やおもしろさに気づかせる。ゲストティーチャーの朗読を聴くことで、自分も朗読をしてみたいという単元を貫く強い思いをもつだろう。そして朗読するためには、物語を読み解く必要があることに気づき、自ら物語を読み解こうとするのではないかと考えた。

手立てⅡーア 生徒一人一人の学びを支える教具の工夫

物語の本文、ワークシート、朗読記号一覧プリント、ふり返りを一冊にした教具を作成する。前時の内容を確認し、本時の学びを整理し、次時につなげていくことで、言動や情景描写を手がかりに作品を読み、登場人物の心情を読み取ることができるのではないかと考えた。

手立てⅡーイ 自分の考えを確かにし、新たな学びにつなげる全体で話し合う場の工夫

一人学びで物語を読みこむ時間を十分に確保することで、生徒たちは登場人物の言動や、情景描写に着目し物語を読み始めるだろう。物語を読む中で周りの仲間が物語をどう読んでいるか知りたいという思いをもつことが予想される。その生徒の思いから、自分自身が読み取ったことを全体で

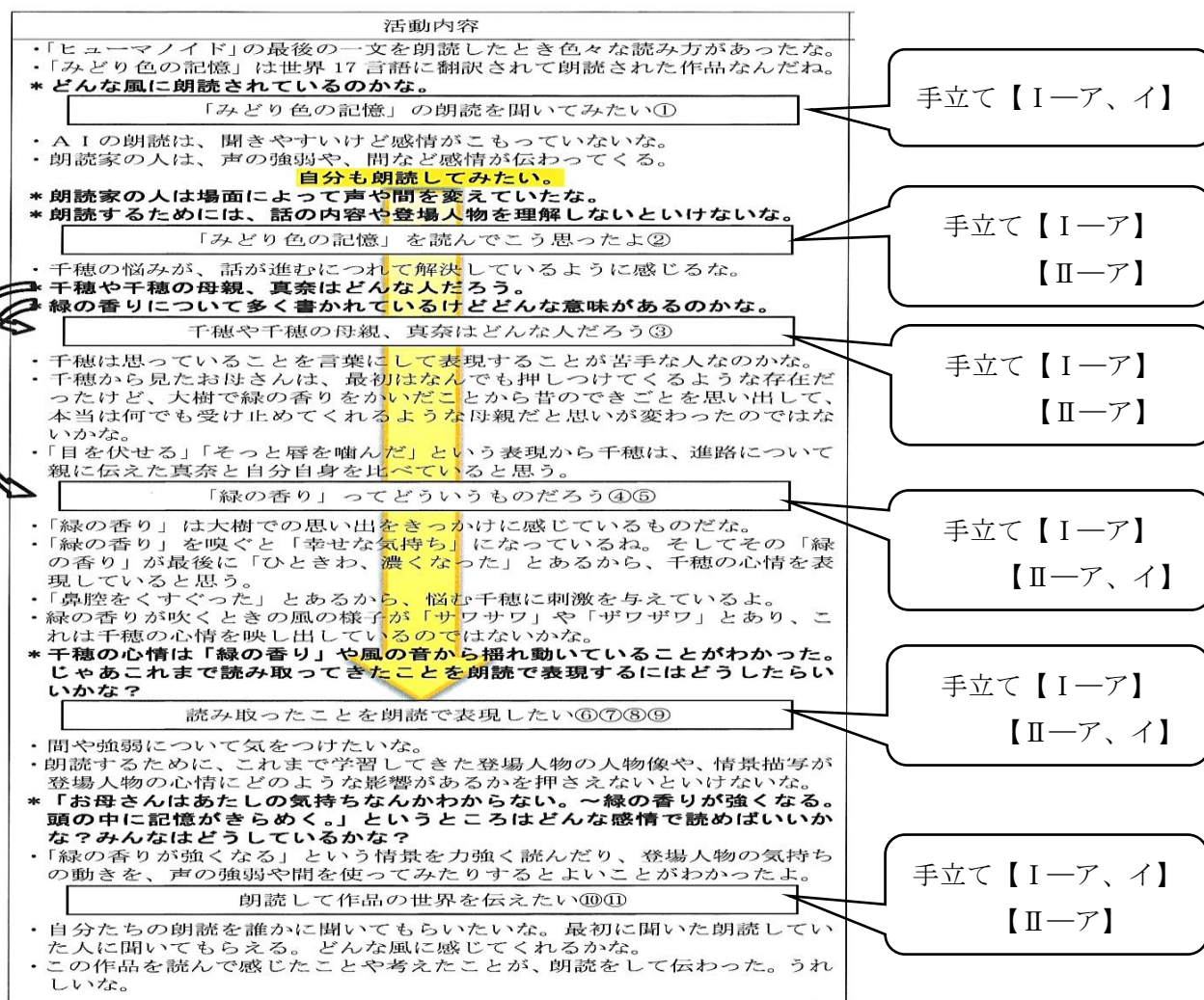
話し合う場を設ける。そうすれば、様々な物語の読み方に気づくことで登場人物の心情を想像することにつながるのでは考えた。

5 実践の記録

(1) 抽出生徒Aについて

生徒Aは、1年時に学習した「星の花が降るころに」や2年時に学習した「ヒューマノイド」では、登場人物の言動や、自分自身の経験から登場人物の心情について考える姿が見られた。また、物語全体を通しての登場人物の心情の変化を読み取ることの楽しさを感じることができた。一方で、情景描写に着目する姿には至らなかった。そのため、本単元では、朗読を通じて言葉や描写に着目して物語を読み深める力を養わせたい。

(2) 単元構想図



(3) 研究の実際

①「みどり色の記憶」の朗読を聴く生徒A【手立てIーア、イ】

第1時の初めに、「みどり色の記憶」という教材を生徒に提示した。世界 17 言語で朗読されていることを教師から生徒に伝え、と、「読んでみたい」「朗読を聴いてみたい」という思いをもつ姿があった。そこで、ゲストティーチャーによる朗読を聴く場を設定した【資料1】。その後、A I による朗読を流し、生徒に比較させた。生徒たちは「A I だと棒読みな感じがする」「感情がこもっていない」と話をする姿があった。第1時のふり返りで生徒Aは「声の強弱や読むスピードの違い、セリフ



【資料1】ゲストティーチャーによる朗読

の思いのこもり方などで、千穂の気持ちがせまってくる感じがしました。」【資料2】と、朗読がもつ表現のおもしろさを感じ始めていた。また、「気付くことができなかった工夫

私は朗読を聴いて、いつも自分でもく読をするよりもその物語の中に入り込むことができた気がします。声の強弱や読むスピードの違い、セリフの思いのこもり方などで、千穂の気持ちがせまってくる感じがしました。気付くことができなかった工夫を知りたいです。」【資料2】と、生徒Aの「知りたい」という思いを引き出すことができた。

【資料2】第1時の生徒Aのふり返り

第1時終了後、生徒Aの「知りたい」という思いから、ゲストティーチャーと生徒Aが対話する場面を設定した。ゲストティーチャーは朗読をする前に物語を読みこむことと、物語を読み深めることの重要性を生徒Aに伝えた。また、登場人物の人物像や心情を捉えることと、情景の意味について考えることといった、物語を読み深めるための2つの視点を生徒Aに伝えていた。ゲストティーチャーとの対話後に生徒Aは、「自分もゲストティーチャーのように朗読をしてみたい。そのためにこの物語を読みたい」と、教師に伝えてきた。

生徒Aの姿から、ゲストティーチャーによる朗読の場を設定したことで、朗読をしたいという思いをもったことがわかる。また、朗読をするためには、物語を読みこむ必要があることに気づいている。

②情景描写に着目して物語を読む生徒A【手立てⅠーア、Ⅱーイ】

第3時では、千穂や千穂の母親の人物像について本文をもとに考える活動をした。生徒Aは複数の千穂の言動から、自信がもてない人物像であると読み取った。その後の全体交流では、生徒Aは仲間の意見から、緑の香りが物語の情景描写としてポイントになることに改めて確認することができた。

第4時では、緑の香りと大樹が物語の中で表しているものは何か、一人学びで考える時間を設定した。情景描写について考える中で、多くの生徒が情景描写についてあまり理解をしていない様子が見られた。そのため、ワークシートを用いて昨年度学習した「星の花が降るころに」の銀木屋をもとに復習した。生徒たちは、銀木屋の木の下をくぐって出たということは、主人公が新たな一步を踏み出したことを表していることを思い出し、情景描写の意味について確認することができた。

情景描写を意識した生徒Aは、本文プリントの中の緑の香りに線を引っ張っていた。そしてそれぞれの緑の香りにはどのような意味が込められているか、自分なりに分析していた【資料3】。生徒Aは分析したものを「千穂の心を落ち着かせてくれる」「昔と今をつなげてくれるもの」「千穂の将来を考えるヒント」【資料4①】とワークシートにまとめた。また、「よく『吸い込んだ』と書かれている」【資料4②】と、千穂の行動と関連付けたり、「昔もった夢を今、思い出させるきっかけとなった香り」【資料4③】と、現在と回想場面に着目したりして情景描写について考えることができた。

第5時では、前時のワークシートをもとに、緑の香りと大樹が物語の中で表しているものは何か全体で話し合う場を設定した。生徒Aは、全体場でワークシート【資料4】に書いた内容を発言した。第5時のふり返りで生徒Bが「生徒Aさ

10

緑の香り ① ② ③
も回も千穂は緑の香りと表現している。千穂は7
どって緑の香りはどんな
もの？
① 小学はのころの思い出
② 夢をみた場所の香り
③ 自分の思いをかえてくれた
千穂はその香りが好き？
★ 好き
★ 胸はぽい 読んでいる幸せ
自分の中で大切なもの

【資料3】生徒Aの本文プリントの一部

○「緑の香り」

① 千穂の心を落ち着かせてくれる
② よく吸い込んだと書かれている。いろいろな気持ち
交わるなかで心を落ち着かせる
③ 昔と今をつなげてくれるもの
④ 昔もた夢を今思い出させるきっかけとなった
香り
⑤ 昔も今もかわらない
⑥ 千穂の将来を考えるヒント
⑦ 千穂を後押し
⑧ 夢のきっかけ

【資料4】緑の香りに着目した生徒Aのワークシート

んの意見をきいて、千穂の夢のこともあらわしているなと思いました。緑の香りがする前後にはお母さんのことが夢のことがかいてありました。」【資料5】と記述した。生徒Bは生徒Aの発言から、情景描写から物語の新たな読み取り方に気づくことができた。

ふり返り④ 情景描写に注目して考えたこと
自分はお母さんと母の関係のことばかりかいていたけれど、
生徒A 意見のきいて、千穂の夢のことにもあらわしているなと思いました。緑の香りがする前後にはお母さんのことが夢のことがかいてありました。

【資料5】第5時の生徒Bのふり返り

③読み取ったことを朗読で表現する生徒A【手立てⅡーア、イ】

第6時では、読み取ったことをもとに朗読でどのように表現するか考える時間を設定した。生徒が朗読の仕方を分かりやすく本文プリントに書きこむために、朗読用記号一覧プリント【資料6】を配付した。また、読み取ったことを朗読で表現するために自分で朗読記号を作成してもよいと話したら、生徒Aは「つぶやく」「少しかえる」【資料6】と、工夫して朗読し、表現しようとする姿が見られた。

第7時ではワークシート【資料7】を配付し、物語の山場となる場面を取り上げ、工夫ポイントを考えさせた。

生徒Aは、自分が読み取ったことを朗読で表現するために、朗読記号を用いながら工夫ポイントを意欲的に書いていた。生徒Aは工夫ポイント①で、『あたしロボットじゃないの』の前には『……』と間があるから、そこで少し落ち着いて「あ」はつぶやくようにどうしようもできないように読む【資料7①】と千穂の感情の変化を「……」で間を取ることで表現しようとした。

工夫ポイント③には「この物語で、千穂の大事ななものとして出てくる緑の香りが強くなるということは大きな意味がある。」【資料7②】と記述し、第4時で学習した情景描写の読み取りを生かしていた。また「緑の香りが強くなる」【資料7②】と、物語の象徴の一つでもある香りがこの場面で強くなることに気づき、「強くなる」という言葉を強めて読もうとしていた【資料7②】。

授業後、教師が生徒Aと対話をするとき、「自分が読み取ったことを朗読してうまく伝わるか」、また「仲間はどのように読み取って朗読しようとしているのか知りたい」という思いをもっていた。

そのため第8時では、第7時のワークシートをもとに全体で話し合う場を設定した。第8時の全体交流で「お母さんはあたしの気持ちなんかわからない。わかろうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。」の読み方について様々な意見がでた。生徒Aは『……』言葉にできない悲しみがあふれ、どうしようもできない気持ちだからつぶやくように声を小さくすると発言した。そこで実際に、生徒Aが朗読し表現する場を設けた。朗読を聴いた他の生徒たちは、生徒Aが言っていた「悲しそうな感じ」【資料8】が伝わってきたと反応を示した。この反応を見た生徒Aは、朗読で読み取ったことが伝わったことの達成感をもっていた。

また、周りの生徒たちも朗読をして聴いている人に伝わるのか試してみたいという思いが多く見られたため、ゲストティーチャーに朗読を聴いてもらう場面を設定した。

記号	意味	使い方の例
/	短い区切り	文節の間に軽く息を入れる
//	長い区切り	場面の切り替えなどで長く息を入れる
○	強調	特に強く読みたい語につける
(線)	強めて読む	特に強く読みたい文章につける
↑	声を上げる	気持ちが高まる感じで声を高くする
↓	声を下げる	落ち着いた感じで声を低くする
?	問いかける	質問や疑問を表す
～	伸ばす・余韻	感情を残したいときに
△	速く	テンポを上げて読む
▽	ゆっくり	丁寧にテンポを落として読む
●	つぶやく	思ひでつぶやくように読んで読む
○	少しかえる	1回目と2回目を少しかえて読む

☆朗読しやすいように自分でマークを作ってもOKです

【資料6】生徒Aの朗読用記号一覧プリント

①
お母さんはあたしの気持ちなんかわからない。わかろうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。さわさわと葉が揺れた。
②
お母さん、あたしの気持ちなんかわからない。わかろうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。さわさわと葉が揺れた。
③
お母さん、あたしの気持ちなんかわからない。わかろうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。さわさわと葉が揺れた。

【資料7】第7時の生徒Aのワークシート

生徒A 朗読して「……」のようを意識して読んでいた。その部分は間をあけて、こゝろ悲しそうな感じが伝わってきました。僕

【資料8】生徒Aの朗読を聴いた後の他の生徒のふり返り

第9時では、読み取ったことを朗読で表現するために、タブレットで自分の朗読を録音して練習し、声の高さや抑揚、間の取り方など、朗読の技術を確認することができた。

第10時では、グループに分かれて朗読の練習をした。物語の後半の場面をそれぞれパートに分けた。人それぞれ物語から読み取った違いや朗読記号の違いがあったが、自分が読み取ったことを、自分のパートで表現できるように朗読するよう教師が指示をした。

第11時ではゲストティーチャーに朗読を聴いてもらう場面を設定した。生徒たちはこれまでの物語の登場人物の人物像や情景描写の読み取りや、朗読の練習を生かして朗読をしていた。生徒たちの朗読後、ゲストティーチャーは、生徒たちは物語を細かく読みこんで、登場人物の心情を表現力豊かに朗読したり、緑の香りや大樹などの情景を、ただの情景にするのではなく、声を聴いてその描写が鮮明に頭に浮かぶような表現がされたりしていたと評価していた。

単元のふり返りで生徒Aは「登場人物の思いなどは文章の全てにちりばめられているのだと気付きました。」「いっさい千穂のことについて語られていなくみえる文章でも千穂についてわかるものがありました。」

【資料9①②】と、様々な言葉や描写に細かく着目し物語を読み深めることで、登場人物の心情など新たに見えてくるものがあることに気づいた。

また、朗読について「作者さんがちりばめた感情を1人1人が自分なりに理解、相手に伝える、とても深いんだなと思いました。」【資料9④】と、朗読をするためには物語を読みこみ、理解する大切さにも気づくことができた。さらに「文章にちりばめられた感情をみつけて、拾っていくのがとても楽しかったです。」【資料9③】と、ふり返りから朗読を通じて物語を読み深めることを楽しむ姿が見られた。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

・仮説Ⅰについて、生徒Aは、ゲストティーチャーの朗読を聴いた後のふり返りで「気付くことができなかった工夫も知りたい。」という思いをもった。また、ゲストティーチャーと朗読の工夫について対話した後、朗読をするためには物語を読みこむ必要があることにも気づき、朗読をしたいという姿が見られた。そして、登場人物の言動や情景描写が豊かな自主教材を活用したことで人物像と情景描写に着目して物語を読む姿があり、単元の最後には「文章にちりばめられた感情をみつけて、拾っていくのがとても楽しかったです。」という思いをもった。このことから生徒が読みたいと感じるような登場人物の言動や情景描写が豊かな「自主教材との出会い」や、ゲストティーチャーの朗読を聴くという「朗読との出合わせ方」の工夫をしたことは、物語や朗読のおもしろさに気づき、自ら読み解こうとする思いをもつことにつながった。

・仮説Ⅱについて、物語の本文に読み取ったことや朗読の仕方を全て書きこめる本文プリント、朗読用記号一覧プリント、ふり返りを一冊にした教具を作成したことで、本文プリントやワークシートに登場人物の言動や情景描写から読み取ったことを書きこみ、学びの跡を視覚化してたどることができた。また、生徒Aは、第5時の全体交流で、自分の意見を伝え仲間の意見を聞いたことで物語の新たな読み方に気づいた。さらに、第8時の朗読の仕方の全体交流でも、物語の読み取り方が異なることから朗読の仕方の違いにも気づき、言葉や情景描写から自分なりに物語を理解し相手に伝える姿が見られた。このことから自分の学びをふり返り、新たな追究へ導く教具を工夫し、自分の考えを伝え合う場を設定したことで登場人物の言動や情景描写を手がかりに作品を読み、登場人物の心情を想像することにつながった。

(2) 今後の課題

・生徒たちは今後、様々な物語文や説明文、古典作品に出合うだろう。その中で言葉や描写に着目して文学作品を読み深めるために、朗読だけでなく様々な文章を読んだり書いたりする活動を通して、生徒の言語感覚を磨いていけるような実践をしていきたい。

① 私自身もいろいろな記憶を読みこんでみて、登場人物の思いなどは文章の全てにちりばめられているのだと気付きました。これは、こんな行動をした、こんなことを言った、簡単な情景描写に登場人物の思いが表れていると聞いています。でも、「大樹」についての文章が1行でも、千穂に思い出たものであり、それが大切なものであることは伝わってきました。② いっさい千穂のことについて語られていなくみえる文章でも千穂についてわかるものがありました。③ 文章にちりばめられた感情をみつけて、拾っていくのがとても楽しかったです。朗読は、自分が意識して読んだらいいのではなく相手に伝わるためには「意味が」なくてはならないと学ぶことができた。④ 作者さんがちりばめた感情を1人1人が自分なりに理解、相手に伝える、とても深いんだなと思いました。

【資料9】生徒Aの単元を終えてのふり返り